

阿部論文へのコメント
(改定前の論文に対するコメント)

山重慎二
(一橋大学大学院経済学研究科)

総括的なコメント

○児童手当の有効性に関する疑問が多く提示されているなか、実証的な検討を行うことは極めて意義があると考えられる。

○結論部分については幾つかの疑問があるが、その点を修正し、政策的な意味づけをもう少し明確化すると興味深い論文になると考えられる。

質問

○児童手当は子どもいる世帯に対する所得再分配である。対象世帯の所得が増加したときに子どもに対する支出が増えればよい。児童手当にそれ以上の何らかの意味を持たせることは、経済学的にはそれほど重要性は無いと思われる。つまり、所得の増加が子供の支出の増加をもたらすという結果が得られるのであれば、児童手当は、子供の効用を引き上げると考えてよいのではないか。逆に、もし児童手当の受給が、所得の増加に伴う支出拡大効果とは異なる効果を持つとすれば、それは大変興味深い結果である。言い換えると、今回効果が有意に認められなかったことは経済学的にはむしろ当然と考えられる一方、もし有意に認められるという結果が出るとすれば、経済学的には興味深い結果となりうる。

○児童手当は経済学的には子どもの養育コストを下げることにより子どもを多く生んでもらう、少子化対策ともいえる政策である。この論点について本稿では全く扱っていない点が疑問である。実際、経済学の分野では、児童手当は、既存の社会保障制度の下で子供が社会に対して持つ外部性を内部化するためのツールであると考えられるようになっている¹。つまり、児童手当の支給は、他人の子供にただ乗りすればよいという行動を抑制し、個人の観点から見ても望ましいと思われる子供数を持つことを可能にする制度であると考えられる。児童手当が持つこのような意味・役割についても考慮すべきではないか。

○子どもの数に応じて補助金をもらえるため子どもを産んで手当を貰う一方、手当だけでは子ども数増加の費用増加を賄えず、子どもの質を下げるような行動を行うか否かが検証できれば興味深いかもしれない。

¹ Groezen, Leers, and Meijdam (2003) "Social security and endogenous fertility: pensions and child allowances as siamese twins," *Journal of Public Economics* 87, 233-251.

○図表 2 は single answer の設問で良かったのか。

○有意な結果が得られなかったのは所得階級が 100 万円単位であり、各階級に含まれる実所得額のばらつきに児童手当受給有無のばらつきが吸収されてしまったためではないか。

○過去に児童手当を受給し貯蓄した親がその後子どものために支出したか否かを検証することは興味深いテーマとなりえるのではないか。

○現物給付と現金給付の効果の差異について、クラウンディング・アウトの効果を踏まえた上で比較することも必要ではないか。